

ギフチョウとヒメギフチョウ

木 俣 繁

ギフチョウ及びヒメギフチョウは、いずれもアゲハチョウ科ギフチョウ属の蝶である。ギフチョウは日本特産の種類で、本州のみに分布しており、秋田県側の鳥海山麓が北限となっている。ヒメギフチョウは、国内では北海道・本州に分布するが、国外ではアムール、中国東北部、朝鮮半島に分布している。ギフチョウは暖地系で、ヒメギフチョウは寒地系と言える。

山形県内には両種とも分布しており、このことは、国内でも数少ない地域となっているのである。県内の分布は、ギフチョウは庄内地方に、ヒメギフチョウが内陸地方になっている。しかし、ギフチョウとヒメギフチョウの分布の接点が県内に数ヶ所ある。その一つの地域が大石田町川前地区である。庄内から最上川沿いに内陸部にむけて、戸沢村、鮭川村、真室川町、舟形町及び大石田町に分布を拡げてきているのである。特に大石田町川前地区は両種の混棲地として有名になっている。

この他にも、庄内から山間部の峠道に沿って分布を拡げてき

たものに、庄内の朝日村から六十里街道沿いに西川町の月山沢に至る個体群がある。また、新潟県から荒川沿いに小国町に入り、更に小国街道沿いに川西町まで分布を拡げてきた個体群がある。そうしてこのような地域では、ギフチョウとヒメギフチョウの混棲地となっている。

ギフチョウ属の幼虫の食草は、ウマノスズクサ科の植物である。県内では、ギフチョウは主としてコシノカンアオイを、ヒメギフチョウはウスバサイシンを食草としている。このうちウスバサイシンは県内に広く分布しているが、コシノカンアオイの分布は主として庄内地方であり、一部内陸地方に分布を拡げている地域もある。大石田町川前地区はそうした地域である。このようにギフチョウの場合には、食草であるコシノカンアオイの分布とギフチョウの分布が重なっている。しかし、ウスバサイシンの方は県内に広く分布し、もちろん、庄内地方にも分布しているにもかかわらず、ヒメギフチョウは庄内に分布を拡

げてはいないのである。

ギフチョウの場合は地域によっては、コシノカンアオイの分布しない地域であっても、その食草としてウスバサイシンに依存している場合がある。しかし、ギフチョウの幼虫の食草は、県内では第一義的にコシノカンアオイであって、ウスバサイシンは副次的なものと考えられる。

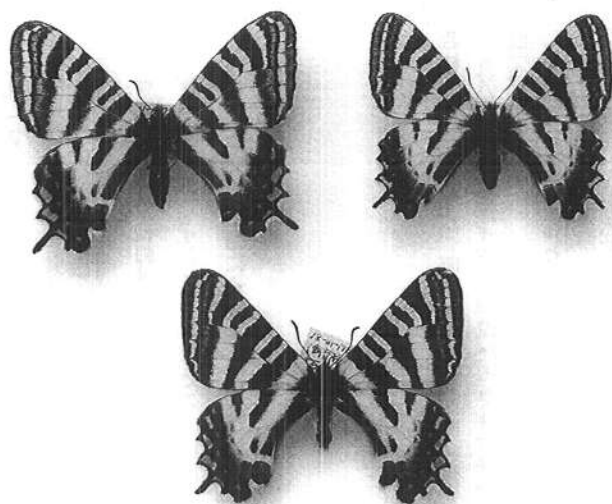
もう一つギフチョウ属の分布を決定づけているものに、成虫の吸蜜植物の分布がある。その重要な種類としては、カタクリやスミレサイシンがある。それ以外の植物でも吸蜜の対象にはなっているが、カタクリやスミレサイシンほどではない。カタクリやスミレサイシンの生育環境は、ギフチョウ属の食草であるカンアオイ類の生育環境とはほぼ一致しており、開花の時期もギフチョウ属の発生時期と重なっていることである。こうした環境は、元来溪流沿いの山裾の林縁部に発達した環境であったと思われる、ギフチョウ属はそうした環境に適応して分布を拡げてきたものと考えられている。このような環境は、一般に里山と言われて人の生活に直結し、人の生活のために利用されてきた山である。木炭や薪、堆肥にする落ち葉や、馬や牛の餌としての下草など、そのような利用のために常に管理され、手入れがなされてきた。ところが、燃料は石油系のものに変わり、肥料なども化学肥料に変わり、また、牛や馬の飼料も殆ど外国からの輸入に頼るようになり、その里山が現在では殆ど利用され

なくなった。そのため、山は荒れるにまかせた状況にある。ギフチョウ属の食草であるコシノカンアオイやウスバサイシンも生育出来なくなり、ギフチョウ属の生育環境も著しく狭まってきたのである。

このようにギフチョウ属の分布が狭まり、生息数が減少してきていることから、環境庁編（現環境省）「日本の絶滅のおそれのある野生生物」（レッドデータブック）では、ギフチョウが危急種に、ヒメギフチョウが希少種にランクされている。山形県版のレッドデータブックやまがた「山形県の絶滅のおそれのある野生動物」には、ギフチョウ、ヒメギフチョウは共に要注目種にあげられている。これは、県内には両種の比較的安定した生息地が存在するためである。レッドデータブックにも取り上げられるようになってきていることから、全国的にこれを保護する動きが出てきている。大石田町は、ギフチョウ属の混棲地として全国的にも有名になり、多くの採集者が訪れるようになった。ことに大石田町では、ギフチョウとヒメギフチョウの間に自然交雑種がしばしば発生することから、それを目当ての採集者も少なくなかった。

先にも述べたように、県内には大石田町の他にもギフチョウ属の混棲地があるが、大石田町以外の混棲地について、最近の状況の調査はされていないし、保護対策もなされていない。そのためいずれの生息地でも、その環境が悪化しており、ギフチョウ

ギフチョウとヒメギフチョウ



上左 ギフチョウ、上右 ヒメギフチョウ、下 ギフチョウ×ヒメギフチョウ（自然交雑種）

ウ属の衰退が進んでいることが考えられる。大石田町ではこの学術的にも貴重なギフチョウ属を、町の天然記念物に指定して積極的に保護していくことが検討されることになった。そのため事前の調査が実施された。その結果、採集者の乱獲に限らず、里山の環境の悪化に伴いギフチョウ属の衰退が認められ、特にギフチョウの衰退が著しく進んでいるような状況であった。

そこで、昭和六十二年にギフチョウとヒメギフチョウを町の天然記念物に指定し、その翌年には罰則付きの保護条例が制定されたのであった。天然記念物に指定された後も、ギフチョウ属の実態を把握していくために、継続して毎年実態調査を実施して、その状況把握につとめてきている。また、監視員を置き監視するだけでなく、生息環境の保全に積極的に取り組んでいる。そのためには、行政側だけでなく、地元住民の協力も大きなものがある。特に川前地区では、ギフチョウ属を守る会を作って積極的な監視活動を実施してきている。また、出来るだけ多くの人たちにギフチョウ属を知ってもらうために観察会なども実施してきているほか、川前地区を重点地域として、林縁部の樹木の間伐や下枝はらい、下草の刈払い等、ギフチョウ属の生息環境の保全のための奉仕も行われてきている。川前地区を重点地域に選んだのは、大石田町におけるコシノカンアオイの分布は、この地域に限られていることで、ギフチョウの保護が最優先の課題として考えられたからであった。ギフチョウ属が町の

天然記念物に指定されて以来すでに十七年を経過しているが、生息環境の好転に伴い、重点地域においては、ギフチョウ属の生息も安定している。この地元住民の保護活動に対して平成十二年四月二十九日の「みどりの日」に「みどりの日自然環境功労者」として環境庁長官の表彰を受けた。

最上川の悠久の流れに沿って、庄内から内陸部に生息地を拡げてきたギフチョウ属、その分布の最先端の大石田町において、地元住民の理解と奉仕によって守られてきたその実状に接して、自然と住民の関わりについて本当にすばらしい姿を見ることが出来たことを心から喜ぶものである。

主な参考文献

- 川副昭人・若林守男 一九七六 原色日本蝶類図鑑 保育社
倉兼 治 一九八三 写真集ギフチョウ・ヒメギフチョウとその混棲 誠文堂新光社
藤沢正平 一九八三 ギフチョウとカンアオイ ギフチョウ研究会
阿部孝義 一九八八 大石田町指定天然記念物ギフチョウ等保護条例の制定について 昆虫と自然 Vol.24 No.4
奥本大三郎 一九八八 当世蝶類憐みの令を憂う 中央公論昭和六十六年六月号 中央公論社
木俣繁・庄司清裕 一九八九～一九九八 ギフチョウ及びヒメギフチョウ保護調査報告書、大石田町指定天然記念物調査報告書 第一集、第十集 大石田町教育委員会